飛騨市の特集



「飛騨の匠」の伝統を守り育み、魅力を全国へ

「飛騨の匠」の技術継承に危機感

近年、建築に携わる方々の高齢化や少子化にともなう慢性的な人手不足、後継者不足などが全国的な課題となっています。また、木材を組んで建物を支える伝統的な建築構法も、骨組みを使わず壁で全体を支える構法と比べ、時間や手間がかかったり価格が高くなりがちなことから、減少傾向です。

どちらが正しい構法かということはありません。しかし、両方を適切に残していかないと、市民の誇りでもある「飛騨の匠」の伝統的な建築技術の継承がうまくいかず、衰退していくことにもつながりかねません。

また、伝統的な構法の建物が減少すると、美しい町並みや景観が損なわれるのではないかという危機感が、市内事業者や職人の皆さんの間でも高まっています。



建築や設計を学ぶ学生らに学びの場を提供

市は９月に、建築や設計などに関する専門技術者を育成する大阪市の学校法人福田学園・大阪工業技術専門学校（ＯＣＴ）と「木造建築技術継承及び人材循環モデル構築に関する包括連携協定」を締結しました。

これは、都市部で建築や設計などを学ぶ学生を対象に、市内の伝統的な町並みや職人文化、豊かな森林資源を身近な教材として使ってもらい、伝統構法とその意義についてより実践的に学んでもらおうというものです。

また、将来的に学生が市へU・Ｉターンするきっかけにしたり、市内の景観維持や伝統的な木工技術の継承につながることも期待されています。

全国へ巣立っていく学生たちが、市の魅力や「飛騨の匠」の技術と文化を全国へ広げる架け橋となることを願って、取組みを進めていきます。



大阪工業技術専門学校との包括連携協定締結式にて

飛騨市での学びが始まりました

今年度からさっそく５人の学生の皆さんが市を訪れ、地元の５工務店でインターンシップを開始。現場で説明を受けながら実際の作業を体験したり、大工さんらの生きた技術や生の声にふれながら、豊かな経験を積んでいます。

また、伝統建築の手法を用いた棟上げ実習も飛騨市文化交流センター交流広場で行いました。近年主流となっている金属部品や重機を使う構法ではなく、ほぞ組みなどを多用し、広さ６畳分、高さ４メートル弱の木造住宅２棟を屋外で組み上げるというもの。あらかじめ加工した木材を大阪市から運搬し、木槌を使って木材を打ちながら人力のみで組み上げました。

当日は、住宅の新築工事で骨組みが完成した際、関係者への感謝やその後の工事の無事を願って行われる「上棟式」も体験。近年ほとんど行われなくなったといわれる神事ですが、歴史・文化的な側面からも伝統構法の学びを深めました。



学校法人福田学園　大阪工業技術専門学校
大工技能学科長
荒井圭一郎（あらい　けいいちろう）さん

■協定先に飛騨市を選んだ理由はなんでしょうか？

職人育成の課題と飛騨市の未来像が深く合致し、自然な形で協定にいたりました。

何より、豊かな森林と町や暮らしの距離が近く、その関係性を身近に感じられる環境が、木造文化を学ぶ場に最もふさわしいと考えているからです。

■学生が伝統構法を学ぶ意義はどんな点にありますか？

すべてが工業化された現代の木造建築では、学生の「考える」機会が損なわれます。手道具を使い、木の性質を身体で感じる伝統構法にはあらゆる段取りが伴います。

森林から暮らしまでの関係性を考え、構築していくこと自体が我々の捉える「建築」であり、その本質を深く学ぶ上で伝統構法は極めて重要な教材なのです。

■学びの場としての飛騨市の印象や利点はどこにあるのでしょうか？

最大の利点は、森林から職人、まちづくり、暮らしまでの距離が近く、町に息づいている点です。職人を先頭に町づくりを担ってきた文化が現存する地域は都市部には存在しません。

「モノをつくるだけでなく、森から暮らしまでの循環を理解した職人」を育成する上で、飛騨市はまさに理想的な学びの場だと感じています。

■学生にはどのような学びを期待されますか？

飛騨という生きたエコシステムに身を置き、全てが整う都市部での「モノづくり」を超え、地域での「仕事・暮らし・交流」を通じアタマとカラダで創造する感覚を自らに注入し将来へ活かす、それが飛騨での学びです。













連携から生まれる相乗効果に期待

市を拠点にして学びを深めるプロジェクトは、学生だけでなく、地域への効果も期待されています。近年の技術者不足や伝統建築の減少を現場から日々実感してみえる現役大工のお二人に、学生との交流や市が学びの場となることへ寄せる期待などについてうかがいました。



工匠金村 代表
金村俊吾（かねむら しゅんご）さん

■学生の印象はどうでしょうか？

実際に学校を見学すると、想像以上に手作業や昔ながらのやり方にこだわってみえて、学生も技術や好奇心があって驚きました。時間が許されるなら僕も行って学びたいくらい。昔ながらのやり方での新築は今は少ないので、造りあげる学びは飛騨でも少ないかもしれませんが、「雲」の組み方とか古い家の解体を見ることでもすごく勉強になるんじゃないかと思います。

■今後に期待することは？

町並みや景観を維持するにしても、よそに頼まんならんというのではやっぱり寂しいじゃないですか。飛騨の子が学校へ行って、技術を持って戻ってきて、維持管理をしていけるというのが一番いいと思うんですね。ただ、伝統的なやり方の仕事が少なくなっていて、難しい面はあるんですが、外観だけでも昔ながらのやり方で美しく維持するというやり方もある。今あるものをいかに残していくかが大事なんじゃないでしょうか。



有限会社永山建設 木造建築大工
田口光廣（たぐち みつひろ）さん

■市内の在来工法の現状はどうですか？

昔ながらの手刻みの仕事は減っていますので、技術を持っていても発揮できない大工さんもみえるのでは。今は時間もコストも削減するやり方を重視する方が増えているので仕方がないことです。私は、機械があっても「手で刻め」と教えられた世代。身につけた技術を生かして、緊張感を持ちながらも自分らしい面白い仕事ができ、いい時代に大工をやらせていただいたと思います。今はちょっと寂しくもありますね。

■学生とふれあってみての感想は？

棟上げされた建物を解体したんですが、私も知らない組み方がしてあって「目から鱗」で勉強になりました。景観保全をするにしても、全部が昔ながらの工法でなくていいし、今の良さを残しながら昔の工法を取り入れてもいいのでは。こうして１人でも多くの若い人が伝統的な技術を学んで関わっていってくれるとうれしいです。

今後さまざまな事業が実施されます！

市民の皆さんにもぜひ関心をもって参加いただいたり、取組みを応援していただくようご協力をお願いします。

■飛騨市内企業での実践インターンシップ
（令和９年２～３月）
市内の工務店等のご協力により学生が現場に入り、市内でのさまざまな働き方を直接学べる機会を設けます。
令和８年夏のインターンでは、学生５名を市内企業５社に受け入れていただきました。

■飛騨市産スギの教材提供プロジェクト（通年）
市有林から伐採されたスギを地元事業者の協力のもと製材から乾燥までを行い、次年度の大工技能学科の教材として大阪工業技術専門学校（ＯＣＴ）へ提供します。

■市民講座・リクルーティング講習会（時期未定）
ＯＣＴ教員による市の町並みの価値に関する講演や、市内工務店向けの人材確保セミナーを計画しています。

問 まちづくり観光課　TEL 0577-73-7463



協定締結によって、将来的に市内の子どもたちや若者が地元に住みながら、オンデマンドで同校の授業を受け、地域での実習を通じて専門職を目指すこともできる「サテライトキャンパス構想」も検討されています。

市外の方の力を借りた新しい枠組みで「飛騨の匠」の技術を守り、人材を育成することは、町並み・景観を維持するだけでなく、市民が誇りとする「飛騨の匠」ブランドの継承にもつながる取組みとなります。

今後の展開にご注目ください。